

西暦	月	日	日誌
2024	10	1	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ポロシャツ、シューズで出かける。気温は24～27℃、南の風2m/s、陽射しは強く、湿度は70%、日傘をさす。鳥屋野潟、カイツブリ夏羽とオオバン、チュウサギ若鳥の後姿、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(後姿)、アキアカネの横姿、鳥屋野潟、アオサギが倒木にとまる(前姿)、コガモ♀横姿、カンムリカイツブリ幼鳥(横姿)、を撮影した。コガモ♀は「フィールド図鑑日本の野鳥」に『エクリプスの脇羽は丸みがあり、雌や幼鳥ではとがり気味』と書かれた姿図から同定した。カンムリカイツブリ幼鳥は、同文献の幼鳥の姿図から同定した。カイツブリは同文献に、『留鳥または漂鳥である。』と書かれ、姿図には、胸の羽が黒っぽい夏羽が描かれていることから夏羽と判断した。同じくオオバンは、『積雪の多いところでは夏鳥。それ以外では留鳥または漂鳥』と書かれている。2024年に、カイツブリを鳥屋野潟で撮影したのは1月14日以来、同じくオオバンは4月11日以来で、久しぶりである。光学ズーム83倍の性能は素晴らしい！！
2024	10	2	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ポロシャツ、シューズで出かける。気温は27～29℃、南南西の風4m/s、陽射しは強く、湿度は65%、日傘をさす。チュウサギ若鳥の後姿、鳥屋野潟、チュウサギ若鳥の後姿見返し、2羽のヒドリガモ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、鳥屋野潟、小松堀排水路、ミゾソバの花(紅紫色)、チュウダイサギ冬羽が岸辺に佇む(前姿)、新堀排水路下流景観、同じく上流景観、アオサギが羽繕いをしたらボサボサの雨覆い羽(横姿)、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、を撮影した。ヒドリガモは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『季節・分布:冬鳥。9月～10月中旬にかけてユーラシア大陸北部から渡来する。全国的に生息するが、北海道では旅鳥で厳寒期は少ない。環境:河川、池、湖沼、海岸、内湾など。行動:越冬期は群れで生活し、他の淡水ガモ類よりよく陸に上がり、青草の葉や芽を食べる。形態:雄の頭部は赤茶色で、頭頂部はクリーム色。雌は他の淡水ガモ類より全体に褐色みが強い。鳴き声:雄は「ピューユ」などと鳴き、雌は「ガッガー」と鳴く。類似種との識別:アメリカヒドリとの交雑個体もいるので、よく混同される。』と書いてある。今秋、始めて撮影した。2023年は9月20日、2022年は9月22日、2021年は9月27日に始めて撮影している。
2024	10	3	2016年版の鳥類を更新訂正(コムクドリまで)。
2024	10	4	2016年版の鳥類を更新追加(サカツラガンまで)。
2024	10	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。雨天から曇天、ポロシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は19～22℃、東の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は79%、雨傘をさす。嘴を羽に隠して休むコガモ♀、マガモ♀見返し、コウホネ群生地に佇むアオサギ(横姿)、排水樋管の吐き口、コガモ♀横姿、を撮影した。コガモ♀は「フィールド図鑑日本の野鳥」に『雌は嘴の両脇が黄色っぽい。エクリプスの脇羽は丸みがあり、雌や幼鳥ではとがり気味』と書いてあることから同定した。コガモは♀の方が♂より貫禄がある。休む場所も♀の方が良い場所を選び、人が近づくとすぐには逃げず、睨みつけて様子を伺う。強い目力を感じる。マガモ♀は、同文献に『雌はオカヨシガモ雌と似るが、翼鏡の色の違いで識別できる。』と書いてある。翼鏡が青いのマガモ♀、白いのがオカヨシガモ♀であるが、筆者の撮影画像には翼鏡が映っていない。翼鏡は横姿の時に一部だけチラッと見えることがあるが、羽根を広げないとはっきりしない。しかし、体長はオカヨシガモよりマガモの方が10cm位大きい。撮影直後に、マガモ♀を追いかけるとカルガモがヨシの草影から現れた。体格がカルガモより大きく見えたのでマガモ♀と判断した。

西暦	月	日	日誌
2024	10	6	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は22～24℃、東南東の風1m/s、陽射しは強い、湿度は78%、日傘をさす。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面、換羽中のカイツブリ(夏羽から冬羽)横姿、カワラヒワの横姿、アオサギが舌を出す、チュウダイサギ冬羽がコウホネ群生地で餌を探す、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(浮上後姿見返り)、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、鳥屋野潟、ニホンカナヘビの後姿、コガモのエクリプス横姿、を撮影した。ニホンカナヘビは、「野外観察のための日本産爬虫類図鑑第3版」に、『日本固有種。北海道、本州、四国、九州と周辺の島、佐渡島、隠岐、杵岐、五島列島、屋久島、種子島等に分布する。平地から山地の草むらや庭先等身近な場所でみられる。地色は褐色で、眼の下から脇腹にかけて白線があるが、直線ではなく破線になっている個体やほとんどみられない個体がいる。腹面は白っぽい色やレモン色の個体が多い。背中から尾にかけてカサカサとしたキールを持った鱗がある。尾の長さは、北海道の個体は頭胴長の半分より少し長いのだが、屋久島の個体は頭胴長の3倍くらいあり、南に南下するにつれて長い傾向にある。敵に出会うと草や枯れ枝に長い尾を巻きつけてバランスをとりながら逃げ、草の茂みに隠れてじっとしていることが多い。自切する尾を持つが、質感からもわかるように、触っただけで切れそうなトカゲほど簡単には切れない。幼体は体全体が暗褐色で尾は黒っぽい。よく混同されるトカゲの鮮やかな青色に比べると地味で、一日で見分けることができる。主に昆虫やクモを食べる。春から秋にかけて一度に2～6卵数回産卵し、交尾は3～7月に行う。オスはメスの腹部をV字型の歯形が残るほど強く噛み付く。トカゲのように成体が卵を保護するようなことはせず、産卵してもほったらかしである。比較的日当たりのよい斜面等に穴を掘って、硬い体や長い尾を上手に折りたたみ冬眠する。カナヘビの名前の由来は諸説あるが、「尾が長く褐色のヘビ」、「可愛いヘビ」等からとられたと言われている。オスは頭部が大きく総排出孔より後ろがやや膨らむことでメスと区別することができる。天敵は多く、シロマダラ等のヘビ類やモズ等の鳥類、イタチ等の哺乳類が挙げられる。』と書いてある。なお、『総排出孔とは、後肢の付け根の部分。糞や尿を排出する。メスは卵を産む。』と姿図とともに書いてある。『総排出孔より後ろがやや膨らむ』のを確認するには、体の側面の姿で判別するようである。残念ながら筆者の画像は上から撮った写真なので、雌雄の判別はできない。
2024	10	8	ウオーキング途中で動植物との一期一会を楽しむ。雨天から曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温17～18℃、南南西の風3m/s、陽射しは弱く雨、湿度は86%、雨傘をさす。コサギ冬羽が餌を探して歩く(横姿)、チュウダイサギ冬羽と5羽のカルガモ、ウミネコ冬羽に換羽中(横姿)、を撮影した。ウミネコが、信濃川の欄干に群れでとまっていた。通行人が通るたびに、舞上がる鳥もいたが、欄干にとまったまま、やり過ごすものもいた。かなり人慣れしているようだ。佐渡汽船が出港すると群れで追いかけて、人の手からかつぱえびせん等を貰っている光景を思い出す。
2024	10	9	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。雨天から曇天、ポロシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は17～20℃、東南東の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は83%、雨傘をさす。鳥屋野潟、ハゼノキ紅葉、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、コウホネ群生地に佇むアオサギ(横姿)、ヒドリガモ♀とマガモ♀とみエクリプス、オシドリ♀とみ、オシドリ14羽の群れ、オシドリ♀とみとみエクリプス、ミゾソバの花(淡紅色)、イシミカワ果実、コガモのエクリプス横姿、カワセミの後姿(見返り)、を撮影した。オシドリは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『季節・分布:留鳥、または冬鳥。ほぼ全国的に生息し、東北地方以北では夏鳥。環境:湖沼、池、河川など。行動:越冬期は木々に覆われた水辺を好んで群れ、溪流や水辺近くの樹洞などに営巣する。コナラなどのドングリを好んで通年食べる。形態:雄は派手な羽衣で、雌は全体が灰褐色。鳴き声:雄は「ビュ」「ピュ」など、雌は「キョッ」「ケッ」などと鳴く。類似種との識別:日本では飼育下にもいるアメリカオシと雌同士が似ているが、眼のまわりは本種より白い。』と書いてある。新潟県では留鳥である。冬鳥のヒドリガモやマガモ、コガモの群れは同じ場所で遊泳していることが多い。オシドリの群れは冬鳥とは一線を画(いっせんをか)くしているように見えた。筆者のオシドリの撮影回数は少ない。最初は2001年12月26日に名古屋の東山動植物園で、2回目は2011年4月7日に上越市の高田公園である。なお、新潟市の潟のデジタル博物館でオシドリは「希少種保護のため非公開」となっている。

西暦	月	日	日誌
2024	10	10	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ポロシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は18～23℃、東北東の風1m/s、陽射しは弱い、湿度は72%、日傘をさす。鳥屋野潟、ソメイヨシノ紅葉、2羽のオカヨシガモ♂、コウホネ群生地に佇むアオサギ(前姿)、キンクロハジロ♀と♂、イヌタデの花(紅色)、コバネイナゴ、シマアシブトハナアブ♂、シャクトリムシ蛾、ユウガギクの白い花、を撮影した。キンクロハジロは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『季節。分布:冬鳥。全国に渡来し、北海道では少数が繁殖する。環境:湖沼、池、河川、内湾、港など。行動:淡水域で、潜水ガモ類と行動をとりにしていることが多い。形態:後頭部には冠羽があり、雄は長めで雌は短い。雌雄とも虹彩は黄色。鳴き声:あまり鳴かない。類似種との識別:スズガモ雌によく似ているが、本種の後頭部には冠羽があり、スズガモの頭部は丸みがあって冠羽はない。本種にも顔の前面が白い個体がいるが、スズガモほどはっきりはしていない。』と書いてある。オカヨシガモは、遠く離れた対岸近くの不鮮明な撮影画像なので自信がない。同上文献に、『雌雄とも次列風切の白が特徴的』と書いてあること、下尾筒付近が黒いことから、オカヨシガモと推定した。
2024	10	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～19℃、南南西の風6m/s、陽射しは弱い、湿度は76%、日傘をさす。鳥屋野潟、湖畔林の伐採、ヨシガモ♂エクリプス、マガモ♂エクリプス2羽横姿、スズガモ♂エクリプス2羽と幼鳥1羽、ヨシガモ♂エクリプスと幼鳥、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、を撮影した。ヨシガモは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『季節。分布:冬鳥。全国に渡来し、北海道では少数が繁殖する。環境:湖沼、池、河川、内湾、港など。行動:群れは10羽ほどになることが多く、他の淡水ガモ類と同じものを食べる。形態:雄の頭部はナポレオンの帽子のような形。また、長い三列風切は房状になっていて、尾羽に覆いかぶさる。雌の後頭部の羽はわずかに長い。鳴き声:雄は「ビュルル」、「フツッ」と鳴き、雌は「グワツ」と鳴く。類似種との識別:雌の嘴は黒く、似ている他のカモ類の雌と識別できる。』と書いてある。ヨシガモは、波の高い沖合に群れで遊泳していたので不鮮明な画像である。雄は嘴基部中央に白い斑点がある。また、ネット検索で、エクリプスと♀の画像を見て、同定した。
2024	10	12	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～23℃、南南東の風2m/s、陽射しは強い、湿度は70%、日傘をさす。バン冬羽、鳥屋野潟、コハクチョウ群れ(50羽)、ハシビロガモ♂エクリプスとヒドリガモ幼鳥、ハシビロガモ♂エクリプス、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、鳥屋野潟、イチモンジセセリ吸蜜、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(見返り)、を撮影した。バン冬羽は「フィールド図鑑日本の野鳥」に『季節。分布:本州北部以北では夏鳥。それよりも南部では留鳥。環境:平地から山地の湖沼、池、河川、水田など。行動:クイナほどは警戒心は強くない。都会のものは人慣れしている。水草などの植物質を食べる他、昆虫類の幼虫なども採食する。形態:雌雄同色。成鳥の嘴は黄色く、基部から頭頂にかけて赤い額板がある。若鳥は全体に淡色で、額板が発達していない。鳴き声:「キュル」「クルル」などと鳴く。類似種との識別:オオバンの脇腹には白い縦斑はないことで識別できる。』と書いてある。姿図には成鳥冬羽が描かれており、それを見て、冬羽と同定した。ヒドリガモ幼鳥は同上文献に記載されていない。着目したのは、嘴が黒っぽいこと、脇羽がフワフワしていることから、ネット検索により同定した。今秋、コハクチョウが湖面で休憩している姿を初めて撮影した。過去5年間は、2023年10月12日、2022年10月16日、2021年10月7日、2020年10月20日、2019年10月19日と、10月上旬から中旬にかけてコハクチョウの渡りを撮影している。

西暦	月	日	日誌
2024	10	13	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～23℃、南の風2m/s、陽射しは強い、湿度は67%、日傘をさす。鳥屋野潟、コハクチョウ、群れから逸れた2羽のコハクチョウ、ホシハジロ♂2羽と♀1羽、スズガモ♀2羽、キンクロハジロ幼鳥、鳥屋野潟、イシミカワ果実、を撮影した。ホシハジロは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『季節。分布：冬鳥。全国的に記録され、北海道では繁殖記録がある。環境：河川、池、水田、湖沼、内湾、港など。行動：休息場から夕方に飛び立ち、採食場へ移動して水生植物の茎や根、種子などの他、潜水して甲殻類などの動物質も食べる。形態：雄は頭部が赤茶色で、虹彩は赤い。雌の頭部は暗褐色で白いアイリングがあり、その白線は後方へと伸びる。鳴き声：「キュッ」などと鳴く。類似種との識別：オオホシハジロに似るが、全体にオオホシハジロは白っぽく見えることで識別できる。』と書いてある。姿図には成鳥冬羽が描かれている。冠羽があるキンクロハジロ幼鳥は同上文献に姿図が記載されている。スズガモ♀は同上文献に姿図があり、『類似種との識別：雌はキンクロハジロ雌に似るが、本種には冠羽はない。』と書いてある。この3種は冬鳥で、ユーラシア大陸北部から渡ってくる。“旅は道連れ、世は情け”という言葉があるが、集団で移動する方が安心なのだろう。故郷でも仲良く集団生活しているのかもしれない。
2024	10	14	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。青空に飛行機雲が映える晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は21～25℃、東南東の風3m/s、陽射しは強い、湿度は61%、日傘をさす。ホシハジロ♂2羽とスズガモ♀、鳥屋野潟、岸辺に佇むアオサギ(横姿)、メナダ、カムリカイツブリ冬羽に換羽中(浮上見返り)、鳥屋野潟、深水中に佇むアオサギ(横姿)、シマヘビ、シマヘビの眼が白濁(脱皮前に眼が白濁する)、を撮影した。シマヘビは「野外観察のための日本産爬虫類図鑑第3版」に『日本固有種。地色は褐色や麦わら色で、4本の黒褐色の縦条があるが、生息場所によって様々な変異がみられる。瞳とその周辺の虹彩が赤いため、眼が赤くみえる。気性が荒く、よく噛みつくが無毒のヘビである。脱皮前に眼が白濁する。』と書いてある。ホシハジロ♂とスズガモ♀が、家族の様に見えた。なんとなく、この3羽は相談しながら何かを探している様子であった。群れから逸れたのかも知れない。周りにはホシハジロやスズガモやキンクロハジロなどの姿は無かった。
2024	10	15	2016年版の鳥類を更新修正(シジュウカラまで)。サシバは登録者「加藤稔*」は同定OK。「加藤稔」は推定？。
2024	10	16	2016年版の鳥類を更新修正(ジョウビタキまで)。シロハラオオハムはオオハムと訂正。
2024	10	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～22℃、北東の風4m/s、陽射しは強い、湿度は73%、日傘をさす。鳥屋野潟、セイタカアワダチソウの花(黄色)、カムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、カムリカイツブリ冬羽に換羽中(後姿)グルーミング、キンクロハジロ♀と♂、キンクロハジロの群れの中にホシハジロ♂とスズガモ♀、ホシハジロ♀と♂、キンクロハジロの群れの中にホシハジロとスズガモ(26羽)、鳥屋野潟、コガモが7羽整列横姿、チュウダイサギがコウホネ群生地中で佇む(横姿)、を撮影した。
2024	10	18	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は24～28℃、南東の風3m/s、陽射しは強い、湿度は63%、日傘をさす。鳥屋野潟、カムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、コハクチョウ幼鳥横姿、コハクチョウ群れ(約500羽)、鳥屋野潟、コサギ冬羽に移行中横姿、コサギ冬羽に移行中横顔、を撮影した。コサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。嘴は周年黒い。冬羽は冠羽はあるが飾り羽は短め。』と書いてある。短めだけでは、夏羽か冬羽か明確な違いは分からない。そこで、冬羽に換羽中と表示した。コハクチョウが目算で約500羽、休憩していた。その中で、2羽の2カップルが、鳥屋野潟の岸辺近くを偵察していた。今夜のねぐらを探しているのかもしれない？

西暦	月	日	日誌
2024	10	19	2016年版の鳥類を更新修正(スズガモまで)。シロハラの1画像をコサメビタキと訂正。さらにシロハラ1画像を削除。スズガモ1画像をホシハジロ♀幼鳥と訂正。
2024	10	20	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天～曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は15～15℃、北の風6m/s、陽射しは強い、湿度は56%、日傘をさす。カンムリカイツブリ冬羽前姿、オオバン見返り、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、鳥屋野潟、アオサギが倒木にとまる(前姿)、カワウ横顔、を撮影した。カワウは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。成鳥は全体に黒く、青紫の光沢がある。幼鳥は腹部が白っぽい。』と書いてある。繁殖期でないと雌雄の区別が難しい。『青紫の光沢』は誤記である。環境省の資料では『褐色光沢』と書いてある。オオバンも『雌雄同色。成鳥の嘴と額板は白い。若鳥は全体に淡色で、額板が発達していない。』と書いてある。オオバンは繁殖期でも雌雄の区別が難しい。潟の向こう岸に、ホシハジロやマガモなどの水鳥が約100羽くらい波間で群れを作っていた。それ以外にどんな鳥がいたか不明である。北風が強く、波が高いので姿が見え隠れしていた。なお、コハクチョウの姿はなかった。
2024	10	21	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は16～21℃、南東の風6m/s、陽射しと風が強い、湿度は48%、日傘をさす。カンムリカイツブリ幼鳥(横姿)、鳥屋野潟、コハクチョウ群れ(約200羽)、コハクチョウ幼鳥と成鳥、疲れたコハクチョウ幼鳥、2羽のコハクチョウ、鳥屋野潟、を撮影した。コハクチョウは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『ユーラシア大陸北部から渡来する。』と書いてある。ユーラシア大陸北部ツンドラ地帯あたりから鳥屋野潟までグーグルアースで直線距離を測ると、約3600kmになる。コハクチョウの飛行速度は50km、気流に乗ると100kmなので、平均75kmとすると、飛行所要時間は約48時間である。コハクチョウ幼鳥はとても疲れるだろう。途中で、命を落とすものもいるかもしれない。
2024	10		鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は17～20℃、南南東の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は61%、日傘をさす。鳥屋野潟、モズみ横姿、ホソヒラタアブ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、オナガガモみエクリプス2羽と♀1羽、コハクチョウ群れ(約50羽)、鳥屋野潟、ハジロカイツブリ冬羽、を撮影した。オナガガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『ユーラシア大陸から渡来する。季節・分布:冬鳥。全国的に渡来する。環境:河川、池、水田、湖沼、海岸、内湾など。行動:ふつうは夜に水田や湿地などで、イネ科植物の種子や青草、落ち穂などを食べる。昼間は休息しているが、昼間でも採食する個体がいる。形態:雌雄とも尾羽は長く、足は鉛色。囀き声:「ピュルピュル」などと鳴く。類似種との識別:成鳥雄に似ている鳥はいない。雌は他のカモ類の雌と似ているが、本種の上嘴は雄ほどではないが鉛色みを帯びることで識別できる。』と書いてある。ハジロカイツブリは、『季節・分布:冬鳥で、北海道では旅鳥。全国に生息。環境:主に内湾、港、河口などの海水域に多いが、湖沼や河川にも入る。行動:小群が群れで生活するものが多いが、春先には大群になる。形態:雌雄同色。夏羽は眼の後方に金色と赤褐色の飾り羽がある。冬羽の頭部は黒く、頬部は白っぽいが、その白黒の境は不明瞭。鳴き声:鳴くことはほとんどない。類似種との識別:似ているミミカイツブリ冬羽は眼と嘴の間が赤く、眼を境にした白黒が水平にはっきり分かれる。』と書いてある。ミミカイツブリは鳥屋野潟で確認されている。写真は不鮮明であるが、眼を境にした白黒が水平にはっきり分かれていないことからハジロカイツブリ冬羽と同定した。

西暦	月	日	日誌
2024	10	23	<p>信濃川やすらぎ堤の八千代橋と昭和大橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は25～28℃、南東の風7m/s、陽射しは弱い、湿度は62%。ウミネコ幼鳥第1回冬羽、ウミネコ幼鳥第2回冬羽、ウミネコ冬羽に換羽中(横姿)、ヒドリガモ群れ(17羽)、コサギ幼鳥、ヒドリガモ♂エクリプス2羽と♀2羽、深水に佇むアオサギ(横姿)、ウミネコ冬羽が腹部をびしょ濡れにして羽ばたく(後姿)、を撮影した。コサギ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『飾り羽はない。足には白っぽさがある。』と書いてあることから幼鳥と同定した。ウミネコは、『第1回冬羽(1W)と第2回冬羽(2W)の姿図』が書いてあることから同定した。ヒドリガモは同じく姿図から、♂エクリプスは背や腰の羽色が、明らかに♀と違うことから同定した。アオサギやウミネコがいても餌場の独占行動はとらないが、コサギが同種同志で、縄張り争いをしていた。また、ヒドリガモ17羽の群れが岸辺にいたが、2羽のハシボソガラスに威嚇されて、岸辺から離れていった。やすらぎ堤岸辺には、野鳥が考えた見えない境界線による縄張りがあり、モザイク模様の如くあるのかも知れない。</p>
2024	10	24	<p>鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は21～21℃、南西の風1m/s、陽射しは弱い、湿度は67%、日傘をさす。鳥屋野潟、マガモ♀横姿、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、アオサギが茂みにとまる(横姿)、アオサギ横顔、コガモ♂エクリプス横姿、を撮影した。アオサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。1年中、成鳥の体上面は青みのある灰色。』と書いてある。留鳥であるが、冬羽と夏羽の解説が無い。婚姻色の説明では、『サギ類は繁殖期が近づくと虹彩の色や眼先が派手な色になる。また、足も赤みを帯びたりもする。この期間は、春先から初夏の一時期である。』と書いてある。アオサギは冬羽と夏羽の移行が明確でない。一年中ゆっくりと換羽しているように見える。</p>
2024	10	25	<p>鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天から曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～21℃、北東の風1m/s、陽射しは強い、湿度は59%、日傘をさす。鳥屋野潟、ホシハジロ♀と♂、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(前姿)、ハジロカイツブリ第1回冬羽、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、鳥屋野潟、ハラビロカマキリ、ダイサギが深水の中を歩く横姿、を撮影した。ダイサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬羽の亜種ダイサギの脛節から跗蹠にかけては白かピンク色または黄色っぽい、亜種チュウダイサギは全体に黒っぽい。』と書いてあることから冬鳥のダイサギと同定した。ハジロカイツブリは、『目より下に褐色部があること、上嘴上面だけ黒い。』と書いてあることから、第1回冬羽と同定した。ハラビロカマキリは、「日本の昆虫生態図鑑」に、『体は黄緑色のものが多いが、紫褐色の個体もいる。前翅中央外側に白色紋がある。体は太め。』と書いてあることから同定した。</p>
2024	10	26	<p>鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～18℃、東南東の風1m/s、陽射しは弱い、湿度は90%、日傘をさす。鳥屋野潟、アオサギ若鳥横姿、キンクロハジロの群れの中にホシハジロ♂とスズガモ♀、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、オオバン群れ5羽、鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面、ハラビロカマキリの壊れた卵囊、カワウ羽乾かす(後姿)、を撮影した。アオサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『1年中、成鳥の体上面は青みのある灰色で、若鳥には褐色みがある。』と書いてあることから若鳥と同定した。ハラビロカマキリの卵は、「カマキリに学ぶ」の卵の写真と『ハラビロカマキリは主に樹木の幹に産卵する。』と書いてあることから同定した。</p>

西暦	月	日	日誌
2024	10	27	信濃川やすらぎ堤の万代橋から八千代橋と昭和大橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～22℃、南東の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は72%。信濃川右岸やすらぎ堤の上流景観、ハクセキレイ♂幼鳥第1回冬羽に移行中(横姿)、ウミネコ幼鳥第1回冬羽、コサギ冬羽に移行中見返り、を撮影した。ハクセキレイ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄ほぼ同色。雄夏羽の頭頂からの上面は黒い。雌の上面は灰色。雄冬羽の上面は灰色っぽい、黒みがある。第1回冬羽(1W)と幼鳥の姿図』が書いてあることから♂幼鳥第1回冬羽に移行中と同定した。約20羽のヒドリガモの群れが陸に上がりた様子であったが、岸辺近くをジョギングする人が多いので、上陸できずに岸辺と沖合を行ったり来たりしていた。それに比べて、約20羽のウミネコの群れは上陸し、人の気配があっても、堂々と昼寝していた。前者が冬鳥、後者が留鳥である。
2024	10	29	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は16～17℃、北東の風3m/s、陽射しは強い、湿度は56%、日傘をさす。カムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(横姿)、鳥屋野潟、オナガガモ♂エクリプス3羽と♀1羽、コサギ幼鳥の横顔(前姿)、コサギ幼鳥が羽毛を逆立てる(前姿)、オナガガモ♂エクリプスとマガモ♂エクリプス、鳥屋野潟、アカミガメ4匹甲羅干し、を撮影した。オナガガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄とも尾羽は長く、足は鉛色。雌の嘴は黒いが鉛色みを帯びている。♂エクリプスと♀の姿図。』と書いてあることから同定した。コサギは、『幼鳥の姿図に飾り羽はない。下嘴が肉色で眼元の黄色が白っぽい。』と書いてあることから同定した。筆者の撮影姿を見て、興奮したのか？羽毛を逆立て、数秒で飛び去った。10月頃からか？、魚食の幼鳥が単独で採餌行動をするようになった。約1年で親離れをしなければならないようだ。草食の水鳥は群れで生活するが、肉食(魚食)の水鳥は単独行動をとるようだ。
2024	10	30	江南区長潟のヒツジ田でコハクチョウとの一期一会を楽しむ。雨天から曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は15～18℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱い、湿度は98%、雨傘をさす。コハクチョウ群れ(40羽)、コハクチョウ幼鳥横姿、コハクチョウ前姿、を撮影した。コハクチョウは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『家族で行動し、他の家族と群れで生活する。水田などで落ち穂や青草の葉、根、種子などを食べる。雌雄同色。幼鳥は全体が灰褐色で、越冬中に徐々に白くなっていく。』と書いてある。約40羽の群れで、1家族4～5羽とすると、8～10家族の群れである。見張り役の成鳥が、食事をしながら何度も顔を上げて警戒していた。灰褐色の幼鳥は2羽だけであった。8～10家族に8～10羽の幼鳥がなぜいないのか？。コハクチョウの世界でも少子化が進んでいるのだろうか？
2024	10	31	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は16～20℃、南南西の風3m/s、陽射しは強い、湿度は70%、日傘をさす。鳥屋野潟、コサギ幼鳥の横顔(前姿)、ダイサギ魚を飲み込む、カワセミ♀幼鳥後姿(見返り)、マガモ♂の流し目(前姿)、鳥屋野潟、ウメドキの赤い実、キタテハ、オナガガモ♂エクリプス2羽と♀1羽、を撮影した。オナガガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄とも尾羽は長く、足は鉛色。雌の嘴は黒いが鉛色みを帯びている。♂エクリプスと♀の姿図。』と書いてあることから同定した。コサギは、『幼鳥の姿図に飾り羽はない。下嘴が肉色で眼元の黄色が白っぽい。』と書いてあることから同定した。キタテハは、翅の裏側が分からないので雌雄は不明。

西暦	月	日	日誌
2024	11	1	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～19℃、南東の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は63%、日傘をさす。コサギ5羽の群れ、鳥屋野潟、カワウ若鳥がブルーミング、カワセミ♂幼鳥前姿、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中が顔から潜水(横姿)、鳥屋野潟、を撮影した。カワウ若鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『若鳥[わかどり]: 明確な規定はないが、第1回冬羽から成鳥羽になるまでの羽衣の鳥。』と書いてあり、幼鳥の姿図の様に腹部が白くて全身が茶褐色でないことから若鳥と同定した。コサギは、『嘴は周年黒い。』と書いてあることから同定した。『非繁殖期は群れで行動することが多く、カワウが追い出した魚を群れで横取りしたりする。1羽では足指を水中で震わせて、魚を物陰から追い出して捕らえたりする。』と書いてある。不鮮明な画像であるが、5羽のコサギの群れである。ファミリーかどうかは不明。2001年の東山動植物園で群れを撮影してから15回目の撮影である。なお、冬鳥のダイサギの嘴は黄色である。
2024	11	3	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～17℃、北北西の風5m/s、陽射しは弱い風が強い、湿度は55%、日傘はささず。コサギ5羽の群れ、鳥屋野潟、カイツブリ幼鳥第1回冬羽に移行中、モズ♂、バン冬羽、アオサギのブルーミング横顔、アキアカネ老齢♂、を撮影した。カイツブリ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『幼鳥の姿図には顔の模様』が書いてあることから、幼鳥が第1回冬羽に移行中と同定した。バンは、『成鳥の冬羽の姿図。』が書いてあることから同定した。今日はGPS機器を忘れてしまった。
2024	11	4	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は15～21℃、南南東の風4m/s、陽射しは強い、湿度は56%、日傘をさす。カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(後姿)、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(お腹を出す)、鳥屋野潟、アオサギ横顔、ソメイヨシノの真っ赤な落ち葉、を撮影した。カンムリカイツブリ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『幼鳥の姿図には顔の模様』が書いてあり、おぼろげにそれが残っていることから、幼鳥第1回冬羽と同定した。ソメイヨシノの落葉は黄色っぽい～茶色っぽい～橙色～真っ赤と、色とりどりである。どちらかというと地味な色が多いが、木漏れ陽にあたって真っ赤に染まっている落葉はとても美しい。
2024	11	5	2008年版の母の花器をリニューアルしました。
2024	11	6	2016年版の鳥類を更新、画像修正(センダイムシクイまで)。
2024	11	7	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は11～11℃、北西の風6m/s、陽射しは弱く風が強い、湿度は61%、傘をささず。コサギ幼鳥の横顔(後姿)、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(浮上横姿)、鳥屋野潟、ハジロカイツブリ第1回冬羽とカイツブリ第1回冬羽、ハジロカイツブリ第1回冬羽前姿、ダイサギの横顔、片足で休むアオサギの前姿、ダイサギが首を伸ばして水の中を歩く(横姿)、を撮影した。カンムリカイツブリ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『幼鳥の姿図には顔の模様』が書いてあり、おぼろげにそれが残っていることから、幼鳥第1回冬羽と同定した。コサギ幼鳥は、下嘴が肉色で、冠羽がないことから同定した。カイツブリとハジロカイツブリ第1回冬羽も『姿図』により同定した。冬鳥のダイサギが渡来してから、チュウダイサギを見なくなった。『夏鳥として中部地方以南に、亜種チュウダイサギが渡来し、繁殖する。』と書いてある。「にいがた野鳥日誌」には『チュウダイサギは留鳥で、信濃川上流、阿賀野川下流の河川敷や中州で繁殖する。』と書いてあるが、冬期(非繁殖期)は、どこにいるのだろうか？

西暦	月	日	日誌
2024	11	8	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は11～13℃、西南西の風3m/s、陽射しは強い、湿度は60%、傘をさす。鳥屋野潟、ヒメアカタテハ、オカヨシガモ♀エクリプスとオナガガモ♀、オカヨシガモ♀と♀エクリプス3羽、カワセミ♀幼鳥後姿(見返り)、カワセミ♀幼鳥前姿(横顔)、鳥屋野潟、オオバン群れ20羽、コサギ冬羽の後姿(横顔)、を撮影した。オカヨシガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。ほぼ全国的に生息し、北海道の一部では夏鳥。本州での繁殖記録もある。環境:河川、池、水田、湖沼、干潟など。行動:越冬期は大きな群れになることは少ない。水面に嘴をつけて浮遊する植物の種子をピチャピチャと食べたり、逆立ちして水底にたまった種子なども食べる。』と書いてある。また、姿図が書いてあり、それを見て同定した。コサギは冠羽が無いが、飾り羽があること、下嘴の肉色も少ないことから、冬羽とした。上記文献には、第1回冬羽の説明が書かれていない。ヒメアカタテハは「日本のチョウ増補版」に、『♀は翅形が♂よりもわずかに幅広く丸みのある傾向』と書かれているが、雌の写真1枚では判別が出来ない。
2024	11	9	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天→晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は10～14℃、南の風3m/s、陽射しは弱い→強い、湿度は70%、帰りは陽傘をさす。鳥屋野潟、ハシビロガモ♀と♂、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(嘴を羽に隠して休む)、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(浮上見返り)、トモエガモ♀2羽、♂3羽、を撮影した。トモエガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。本州の日本海側に多く、太平洋側では不定期に少数が記録されるだけ。南西諸島では迷鳥。環境:河川、池、湖沼など。行動:日中は休息し、夕方から行動しはじめ、水中に潜って沈んでいるドングリヤ、地上ではイネ科植物の種子などを食べる。形態:雄の顔にある巴模様は、雌にもうっすらとそれらしきものが見られる。鳴き声:低い声で「クオッ」「ググッ」などと鳴く。』と書いてある。不鮮明な画像であるが、姿図が書いてあり、それを見て同定した。ハシビロガモはマガモと一緒にいることが多いが、体格が小さくクチバシが大きいので、識別し易い。
2024	11	10	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は12～16℃、南南東の風3m/s、陽射しは強い、湿度は60%、陽傘をさす。カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(羽ばたく後姿)、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(浮上横姿)、キジバト見返り、チュウダイサギ冬羽(横姿)、アオサギ若鳥が小魚を銜える(横姿)、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)グルーミング、ダイサギが深水にたたずむ、チュウダイサギ冬羽が片足で佇む(横姿)、を撮影した。アオサギ若鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『姿図に、若鳥は全体に褐色みがある。』と書いてある事から同定した。チュウダイサギに遭遇、同上文献に、『ダイサギとチュウダイサギの姿図があり、亜種ダイサギはアオサギよりも大きく、亜種チュウダイサギはアオサギよりも小さい。』と書いてある。アオサギ若鳥も撮影したが、三者を並べて撮影することはできない。しかし、チュウダイサギは傍らのカワウと比較するとそれほど大きく見えなかったことから、アオサギよりは小さいと思われる。
2024	11	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は17～20℃、南南西の風1m/s、陽射しは強い、湿度は71%、陽傘をさす。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽と成鳥冬羽、コハクチョウ群れ(12羽)、ジョウビタキ♀横姿、を撮影した。カンムリカイツブリは、手前の幼鳥と成鳥の体の大きさの違い、顔立ちの違いが良く分かる画像である。コハクチョウの群れは、親松排水路側の岸辺にもいたようだ。また、V字飛行している群れもいた。しかし、オオハクチョウの渡来は確認していない。もうすぐか？

西暦	月	日	日誌
2024	11	12	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は15～18℃、南南東の風2m/s、陽射しは強い、湿度は78%、陽傘をさす。カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(前姿)、鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面に飛行機雲が映る、ハゼノキ紅葉、6羽のコハクチョウが離水、2羽のトモエガモ♂が嘴を羽に隠し休む、鳥屋野潟、を撮影した。トモエガモ♂は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。本州の日本海側に多く、太平洋側では不定期に少数が記録されるだけ。南西諸島では迷鳥。日中は休息し、夕方から行動しはじめ、水中に潜って沈んでいるドングリや、地上ではイネ科植物の種子などを食べる。』と書いてある。日中の休息時間帯に撮影するので、顔が見えない写真が多い。鳥屋野潟は鳥獣保護区なので、水鳥の群れの中で寝ていれば安心なのだろう。しかし、オオタカなどの天敵に襲われる可能性はある。雪解けの頃に、湖畔林でオオタカ幼鳥を見かけることが多い。
2024	11	13	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は15～15℃、北の風5m/s、陽射しは強い、湿度は55%、陽傘をさす。カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(横姿)、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽見返り、鳥屋野潟、ミサゴ♂飛翔、ミサゴ♂飛翔ホバリング、オナガガモ♀と♂、ウマノズクサ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、ダイサギが首を伸ばして水の中を歩く(横姿)、を撮影した。ミサゴ♂は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥、冬鳥。ほぼ全国で、寒冷地のもは冬期には暖地へ移動する。沖縄列島では冬鳥。環境：海岸、河口、湖沼、河川など。行動：多くは1～2羽で生活する。水面上を停空飛行して主に魚を獲る魚食性。近年、増加傾向にある。形態：雌雄ほぼ同色。雄の胸は褐色みが少なく、雌は多い。幼鳥の翼上面の各羽縁は白っぽい。』と書いてある。姿図の雌は胸の帯びは黒くて太い。雄の胸の帯は褐色みが少ないことから、♂と同定した。ホバリングして、水中の魚を狙ったが、捕獲できなかったようだ。筆者は、ギンブナを捕獲して低空で飛翔する姿を撮影したことがある。
2024	11	14	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は12～15℃、東北東の風2m/s、陽射しは強い、湿度は61%、陽傘をさす。カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(横姿)、鳥屋野潟、ローザレッドナオミの赤い花、コハクチョウ群れ(80羽)、カワウ羽乾かず(後姿)見返り、鳥屋野潟、ダイサギの横顔、カイツブリ第1回冬羽、を撮影した。カンムリカイツブリ幼鳥は2羽並んで遊泳していた。どちらも頸に幼鳥の縞模様がうっすら残っていた。周辺に親らしき成鳥はいなかった。コハクチョウの群れ80羽は、西ではなく東へ向かって飛び去って行った。西側の小松堀排水路合流付近で、浚渫作業船が泥上げ作業を行っていたせいかもしれない？ダイサギ横顔は、光の具合によって嘴の色が違うので2画像添付した。カイツブリは「フィールド図鑑日本の野鳥」の1Wの姿図に、『上嘴の上部以外は黄橙色』と書いてあることから第1回冬羽と同定した。
2024	11	15	信濃川やすらぎ堤の柳都大橋から昭和大橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は14～17℃、南南東の風1m/s、陽射しは弱い、湿度は82%。柳都大橋下流景観、ウミネコ冬羽(横姿)、ハクセキレイ♂幼鳥第1回冬羽に移行中(横姿)、コサギ冬羽が餌を探して歩く(横姿)、セグロカモメ横姿、を撮影した。ハクセキレイ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄ほぼ同色。雄夏羽の頭頂からの上面は黒い。雌の上面は灰色。雄冬羽の上面は灰色っぽい、黒みがある。第1回冬羽(1W)と幼鳥の姿図』が書いてあることから♂幼鳥第1回冬羽に移行中と同定した。セグロカモメは、『冬鳥。ほぼ全国に渡来。』、冬羽の姿図があることから、同定した。
2024	11	20	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は7～10℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱い、湿度は65%、陽傘をさす。鳥屋野潟、ハゼノキ紅葉、イチョウ黄葉、群れから逸れたコハクチョウ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、鳥屋野潟、イロハモミジ紅葉、を撮影した。陽射しが良くときどき、紅葉が映える、爽やかな秋晴れであった。

西暦	月	日	日誌
2024	11	21	鳥屋野湯公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は12～12℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱い、湿度は69%、帰りに陽傘をさす。コハクチョウ群れ(60羽)、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(前姿横顔)、排水樋門の吐き口、コハクチョウ飛翔、セグロカモメ冬羽水に顔を潜す(横姿)、セグロカモメ冬羽横姿、を撮影した。セグロカモメは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。ほぼ全国に渡来。環境:沖合、沿岸、内湾、港、河口の他、内陸の淡水域にも入る。行動:群れでいることが多く、他の大型カモメ類に混じる。主に魚類を食べ、水面に降り立って嘴で捕る。形態:雌雄同色。背の色はオオセグロカモメより淡く、初列風切は黒いので色の差が顕著。』と書いてある。成鳥冬羽の姿図が書いてあり、撮影画像とほぼ同じである。水に顔を潜したのは、水底の魚を狙ったのであろう。信濃川下流の船着き場付近の突堤に、群れで休んでいることが多い。
2024	11	25	鳥屋野湯公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は9～12℃、南西の風3m/s、陽射しは強い、湿度は61%、陽傘をさす。カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽)、鳥屋野湯、ハゼノキ紅葉、カイツブリ第1回冬羽、キンクロハジロ♀幼鳥第1回冬羽、イロハモミジ紅葉、を撮影した。キンクロハジロは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。ほぼ全国に渡来。北海道では少数が繁殖する。行動:淡水域で、潜水ガモ類と行動をとりにしていることが多い。形態:後頭部には冠羽があり、雄は長めで雌は短い。雌雄とも虹彩は黄色。』と書いてある。♀成鳥と幼鳥の冬羽の姿図が書いてある。幼鳥の方が褐色味が強く、羽毛がフワフワしていることから、♀幼鳥第1回冬羽と同定した。周囲には、オナガガモやカンムリカイツブリが羽に嘴を隠して休んでいたが、キンクロハジロはこの幼鳥だけであった。
2024	11	26	ウオーキングで、ホテル日航新潟31階からの景観と信濃川右岸周辺の動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は11～16℃、南東の風7m/s、陽射しは強い、湿度は51%、風が強くて陽傘はさせず。ホテル日航新潟31階からの景観、信濃川河口景観、ホテル日航新潟31階からの景観、粟島、カンムリカイツブリ冬羽横姿、ヒドリガモ♂とアメリカヒドリ♂、を撮影した。アメリカヒドリは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『数少ない冬鳥。越冬期はヒドリガモなどの群れに入って生活していることが多い。』と書いてある。♂成鳥の冬羽の姿図が書いてある。嘴基部が黒く、雄の顔は白っぽく、眼の後方は光沢のある緑色であることから、アメリカヒドリ♂と同定した。ヒドリガモとアメリカヒドリとの交雑個体もいるらしい。
2024	11	27	ウオーキングで、信濃川右岸の八千代橋周辺の動植物との一期一会を楽しむ。雨天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は12～13℃、南西の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は85%、雨傘をさす。アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♂、アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♀、アメリカヒドリ♂羽ばたく、アメリカヒドリ♂、を撮影した。アメリカヒドリは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『数少ない冬鳥。環境:河川、池、湖沼、内湾など。行動:越冬期はヒドリガモなどの群れに入って生活していることが多い。形態:雄の顔は白っぽく、眼の後方は光沢のある緑色。鳴き声:雄はヒドリガモに似た声で「ピューユ」などと鳴く。類似種との識別:似ている鳥はいないが、ヒドリガモとの交雑個体と見間違われることがある。雌はヒドリガモ雌より頭部が白っぽく、ヨシガモ雌に似ているが、より白っぽいことなどで識別できる。』と書いてある。♂成鳥の冬羽の姿図が書いてある。嘴基部が黒く、雄の顔は白っぽく、眼の後方は光沢のある緑色であることから、アメリカヒドリ♂と同定した。残念ながら、アメリカヒドリ♀はいなかった。アメリカ大陸北部からベーリング海峡を渡って、ユーラシア大陸北部へ移動して、ヒドリガモの群れに混じって日本に渡来するらしい。
2024	11	29	ウオーキングで、信濃川右岸の八千代橋周辺の動植物との一期一会を楽しむ。雨天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は8～7℃、北西の風8m/s、陽射しは弱い、湿度は80%、雨傘をさす。ウミネコ冬羽(横姿)、ウミネコ幼鳥第1回冬羽、ヒドリガモ♀と♂、を撮影した。アメリカヒドリは姿が見えなかった。残念

西暦	月	日	日誌
2024	11	30	ウォーキングで、信濃川右岸の八千代橋周辺の動植物との一期一会を楽しむ。雨天、Tシャツ、ワイシャツ、ダウン、シューズで出かける。気温は9～9℃、西北西の風8m/s、陽射しは弱い、湿度は69%、雨傘をさす。カムリカイツブリ浮上横姿(冬羽)、ウミネコ冬羽(横姿)、ウミネコ幼鳥第1回冬羽、ウミネコ幼鳥第2回冬羽、を撮影した。ウミネコ幼鳥第2回冬羽は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、姿図がある。第4回冬羽で成鳥になるらしいが、第3回冬羽については何も書かれていない。ウミネコ冬羽(横姿)には2羽の成鳥が写っているが、手前は嘴と足の色が青みがかっているため第3回夏羽から第4回冬羽に移行中の若鳥かもしれない。上記文献には、4年で成鳥になると書いてあることから成鳥とした。奥のウミネコは嘴と足の色が黄色なので成鳥冬羽と考えられる。
2024	12	1	2016年版の鳥類を更新(ダイサギまで)。
2024	12	2	2016年版の鳥類を更新(タカブシギまで)。
2024	12	3	ウォーキングで、信濃川右岸の八千代橋周辺の動植物との一期一会を楽しむ。雨天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は10～10℃、南の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は67%、雨傘をさす。アメリカヒドリ♂横姿、アメリカヒドリ♂グルーミング、アメリカヒドリ♂横姿、アメリカヒドリ♂後姿、アメリカヒドリ♂横姿、アメリカヒドリ♂威嚇ポーズ、アメリカヒドリ♂横姿、を撮影した。八千代橋の上から望遠で撮影した。20羽ほどのヒドリガモの群れの中に、アメリカヒドリ♂1羽だけがいた。アメリカヒドリの♀は見かけなかった。
2024	12	4	2016年版の鳥類を更新(タシギまで)。
2024	12	9	鳥屋野潟の弁天橋でカムリカイツブリとの一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は4～6℃、南西の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は78%、帰りに雨傘をさす。カムリカイツブリ浮上横姿(冬羽)、カムリカイツブリ浮上前姿(冬羽)、鳥屋野潟、を撮影した。カムリカイツブリは「フィールド図鑑日本の野鳥」の姿図に、『冬羽の嘴はピンク色。』と書いてある。白色と黒褐色の羽毛の成鳥が描かれている。陸に上がることはなく、巣も水面に水草や小枝を集めて浮かべたものである。足が大きくて陸上で歩ける形状になっていない。いつも単独で、懸命に潜水して、スジエビや小魚の捕獲をしている。徒党を組んで餌を捕獲する習性は無いようである。腹を満たした後は、羽繕いを行って、羽に顔を埋めて寝ている。
2024	12	10	ウォーキングで、信濃川右岸の八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は6～7℃、西南西の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は73%、陽傘はささず。アメリカヒドリ♂横姿、アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♀、ウミネコ冬羽(横姿)、ウミネコ冬羽(横顔)、ウミネコ幼鳥第1回冬羽、八千代橋下流景観、を撮影した。20羽ほどのヒドリガモの群れの中に、アメリカヒドリ♂が1羽だけいた。アメリカヒドリの♀は見かけなかった。ウミネコが馴れ馴れしく筆者に近づいてくる。じーっと筆者を見つめてくる。たぶん、人に近づくと、スナック菓子などの餌が貰えると思っているのかも？、佐渡汽船の甲板にいる乗客から餌を貰う習慣が身についているようだ。そういえば、20数年前に、東京都港区の運河沿いのベンチで弁当を食べていると、三毛猫などの野良猫が鳴きながら近づいて来て、食べ物を要求することがあった。人間から餌を調達できると考えている野生動物が増えている様な気がする。

西暦	月	日	日誌
2024	12	12	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は5～6℃、西北西の風8m/s、陽射しは弱い、湿度は64%、帰り際に雨傘をさす。鳥屋野潟、鳥屋野潟、片足で休むアオサギ若鳥の横姿、ミコアイサ幼鳥(横姿)、チュウダイサギ冬羽が片足で佇む(横姿)、チュウダイサギ冬羽(横顔)、群れから逸れたコハクチョウ、を撮影した。ミコアイサは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。全国に渡来するが、南西諸島では迷鳥。北海道北部では数つがい繁殖する。環境:湖沼、河川、池、河口や入り江にも入り、春の渡り期には大きな群れになる。行動:多くは群れで行動し、活発に動きまわって、潜水しては魚類、甲殻類、水生昆虫などを食べる。形態:雄成鳥の眼のまわりが黒いことからパンダの顔に似ているとして、パンダガモと呼ばれる。鳴き声:「クックツ」と鳴くが、あまり聞こえない。9月中旬から10月下旬にかけてユーラシア大陸北部から渡来する。』と書いてある。♀成鳥と第1回冬羽の姿図が書いてあるが、幼鳥の姿図はない。ネット検索で調べてみたが、幼鳥と♀の区別が難しい。しかし、羽毛がフワフワしていることから、幼鳥と推定した。他のミコアイサは周辺にいなかった。また、黄色いくちバシで黒い足のチュウダイサギを久しぶりに撮影した。
2024	12	20	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は5～7℃、南西の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は69%、帰り際に陽傘をさす。鳥屋野潟、セグロカモ冬羽横姿、鳥屋野潟、ミコアイサ♂浮上(横姿)、ミコアイサ♀浮上(横姿)、鳥屋野潟、ミコアイサ♀浮上(前姿)、片足で休むアオサギの前姿、アオサギ横顔、ラクウショウのオレンジ色の落葉、を撮影した。ラクウショウは「樹木大図鑑」に、『北米からメキシコ原産で、原産地では樹高50m、直径3mになる。日本では公園樹として植えられ、樹高30mほどになる。別名はヌマスギと呼ばれる。針形の葉が枝に互生に着く。』と書いてある。似た樹木で中国原産の「生きた化石」と言われるメタセコイヤがあるが、これは針形の葉が枝に対生につく。
2024	12	24	ウオーキングで、信濃川右岸の八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は4～4℃、西北西の風9m/s、陽射しは弱い、湿度は71%、雨傘はささず。アメリカヒドリ♂後姿見返りして鳴く、アメリカヒドリ♂横姿、アメリカヒドリ♂後姿、カワウ♂遊泳(前姿横顔)、アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♀、を撮影した。20羽ほどのヒドリガモの群れの中に、アメリカヒドリ♂が1羽だけいた。アメリカヒドリの♀は見かけなかった。「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、アメリカヒドリは体長45～56cm、翼開長76～89cmで、ヒドリガモは体長45～51cm、翼開長75～86cmである。体長が5cmセンチほどアメリカヒドリの方が大きい。アメリカヒドリ♂は、採餌中に近づいてきたヒドリガモを威嚇しながら懸命に草を食べていた。ヒドリガモの群れと一緒に行動するアメリカヒドリ♂は、たぶん嫌われ者の様な存在なのかもしれない。仲がよさそうには見えなかった。
2024	12	30	鳥屋野潟の弁天橋で水鳥との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は3～6℃、南の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は80%、帰り際に陽傘をさす。鳥屋野潟、オオバン若鳥、カムリカイツブリ冬羽に換羽中が2羽(後姿)、カムリカイツブリ冬羽に換羽中(浮上後姿見返り)、カイツブリ幼鳥第1回冬羽に移行中、親松排水路、を撮影した。オオバン若鳥は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『形態:雌雄同色。成鳥の嘴と額板は白い。若鳥は全体に淡色で、額板が発達していない。』と書いてあり、姿図には『成鳥(左)の額板は大きく、若鳥(右)では小さい。若鳥の虹彩は橙色』と書いてあることから、若鳥と同定した。カムリカイツブリは、2羽が並んで遊泳していたが、成鳥冬羽に移行中と幼鳥第1回冬羽に移行中の様にも見えた。親松排水路は、弁天橋から鳥屋野潟を挟んで遠い対岸にあるが、光学80倍ズームで撮影した景観である。コハクチョウ?の群れが写っている。

西暦	月	日	日誌
2024	12	31	ウオーキングで、信濃川右岸八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。荒天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は6~7℃、南南西の風7m/s、陽射しは弱い、湿度は100%、雨傘をさす。アメリカヒドリ♀横姿採餌、アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♂、アメリカヒドリ♀羽ばたく、アメリカヒドリ♀後姿見返り、を撮影した。20羽ほどのヒドリガモの群れの中に、アメリカヒドリ♀が1羽だけいた。アメリカヒドリの♀は見かけなかった。「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『日本では数少ない冬鳥。アメリカ大陸北部からベーリング海峡を渡って日本に渡来する。』珍しい冬鳥である。元気に堤防の芝草を採餌していた。
2025	1	6	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は3~6℃、南の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は66%、傘はささず。鳥屋野潟、カンツバキの赤い花、鳥屋野潟、カワウ幼鳥横姿、チュウダイサギ冬羽が岸辺に佇む(前姿)、チュウダイサギ冬羽(横顔)、ヒヨドリ前姿、ヒガラ横姿、アオジ♀前姿、コハクチョウ群れ(約300羽)、鳥屋野潟、シロネ移殖の看板、エナガ若鳥、を撮影した。エナガ若鳥は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布:留鳥、または漂鳥。九州以北。環境:平地から山地の林、市街地の公園など。行動:繁殖期以外は群れで生活する。繁殖は早く3月には営巣し、繁殖が終わると群れになって生活する。形態:雌雄同色。嘴が短く、尾羽が長い。』と書いてあり、幼鳥の姿図には『脛は赤いが8月頃には黄色になる。』と書いてあることから、第1回冬羽から成鳥になるまでの若鳥と同定した。ヒガラは、成鳥の姿図から同定した。
2025	1	12	鳥屋野潟の弁天橋で水鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、ブーツで出かける。気温は2~5℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱い、湿度は81%、傘はささず。ミコアイサ♀横姿、ミコアイサ♂横姿、ミコアイサ♀と♂、マガモの♀と♂、鳥屋野潟、親松排水路、角田山と弥彦山、を撮影した。ミコアイサは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『形態:雄成鳥の眼のまわりが黒いことからバンダの顔に似ているとして、バンダガモと呼ばれる。』と書いてあり、姿図には成鳥♂と♀が描かれていることから同定した。親松排水路、角田山と弥彦山は、弁天橋から光学80倍ズームで撮影した景観である。他にカルガモとコガモがいたが、♀と♂と一緒に遊泳している姿が、あちらこちらで見られた。カモ類の恋の季節は、寒い1月なのである。
2025	1	13	ウオーキングで、信濃川右岸八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、ブーツで出かける。気温は2~6℃、西北西の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は100%、雨傘をさす。カンムリカイツブリ冬羽遊泳横姿、ウミネコ冬羽が3羽、ヒドリガモ♂遊泳横姿、ヒドリガモ♂グルーミング横姿、ヒドリガモ♂眼差し横姿、を撮影した。15羽ほどのヒドリガモの群れがいたが、アメリカヒドリは見かけなかった。カンムリカイツブリが信濃川の中央付近で、懸命に潜水して小魚を探していた。中央付近は流れが速いので、小魚捕獲は難しいのではないかと、岸辺近くの流れの緩やかな場所に獲物があると思うかと、1羽だけなので恐らく第1回冬羽の若鳥で縄張りをもっていないのかもしれない。成鳥の場合は2羽で、縄張りでも捕獲行動をしていることが多い。
2025	1	19	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、ブーツで出かける。気温は1~6℃、南南東の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は68%、傘をささず。鳥屋野潟、3羽のオナガガモ♂、鳥屋野潟、コハクチョウのファミリー飛翔、鳥屋野潟、ヒヨドリ見返り、カワウ♂繁殖羽の顔、を撮影した。オナガガモの100羽ほどの群れの中に、トモエガモ数羽を低解像度で撮影した。コハクチョウがファミリー単位で飛び立っていった。恐らく、二番穂が繁茂している江南区の水田地帯へ向かったのだろう。南風で、午後は最高気温10℃の暖かく穏やかな日和になりそうである。

西暦	月	日	日誌
2025	1	21	ウオーキングで、信濃川右岸八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は5～8℃、南南西の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は76%、傘はささず。ウミネコ冬羽グルーミング(後姿)、アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♂、アメリカヒドリ♂横姿、アメリカヒドリ♂横姿見返り、を撮影した。15羽ほどのヒドリガモの群れの中に、アメリカヒドリ♂がいた。ウミネコ冬羽が首を後に反らして、羽繕いのグルーミングをしていた。鳥の首は、まるで「お岩さんの首」の様に全方位に、くによくにやと自由に動くものだな～と改めて感心した。
2025	1	26	ウオーキングで、信濃川右岸八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は2～5℃、南の風3m/s、陽射しは弱い、湿度は90%、傘はささず。アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♂、アメリカヒドリ♂横姿採餌、コサギ冬羽が餌を探して歩く(横姿)、アビ冬羽横姿、カンムリカイツブリ冬羽遊泳横姿、を撮影した。アビは初めて撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『季節・分布:冬鳥、または旅鳥。環境:海上生活で、稀に漁港や河川、湖沼にも入る。行動:多くは1羽だが、春に群れるものもある。潜水して小魚や甲殻類などを捕る。形態:雌雄同色。嘴が上に反って見え、冬羽も幼鳥も風切以外の上面の各羽には白斑がある。鳴き声:越冬期はほとんど鳴かないが、春先に「アアー」と鳴く。類似種との識別:オオハムとシロエリオオハムの嘴は真っ直ぐ。両種とも成鳥冬羽は上面に白斑がなく、幼鳥の白斑は本種のように点状ではない。』と書いてある。「海上生活で、稀に漁港や河川、湖沼にも入る」ことから、まさに一期一会である。
2025	2	2	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は2～6℃、南の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は72%、帰りに日傘をさす。鳥屋野潟、セグロカモメ冬羽横姿、ミコアイサ♂浮上(横姿)、キジバト前姿、カイツブリ幼鳥第1回冬羽に移行中、を撮影した。キジバトは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布:留鳥、または漂鳥。全国だが、寒冷地のもは冬期は暖地に移動する。環境:市街地から山地の開けた場所に生息し、あまり深い林内には入らない。行動:通年つがいで行動するものが多いが、若い個体などは非繁殖期は群れで行動している。形態:雌雄同色。全体には灰褐色で、背からの上面はキジの雌を思わせる模様。鳴き声:「デデポーデデポーポー」と鳴き、ときに「ブン」という声を出す。類似種との識別:本種に似た羽衣のドバトがいるので注意が必要。』と書いてある。姿図の首の模様からキジバトと同定した。撮影画像は、胸と腹の羽毛を膨らませて日向ぼっこをしている前姿の写真である。
2025	2	3	ウオーキングで、信濃川右岸八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は4～8℃、南東の風5m/s、陽射しは弱い、湿度は62%、傘はささず。アメリカヒドリ♂後姿採餌、アメリカヒドリ♂前姿採餌、アメリカヒドリ♂横姿採餌、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、ヒヨドリ後姿、オオバン見返り、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(浮上横姿)、コガモの群れ8羽着水、ツグミ♂横姿、信濃川右岸やすらぎ提の上流景観、を撮影した。魚食のカンムリカイツブリを信濃川でよく見かける。信濃川下流河川事務所のネット情報では、信濃川下流におよそ41種類の魚類がいるそうである。河口から関屋分水路水門までの区間は、奥が長く細い湾の様な汽水環境になっている。魚類等に配慮した水辺環境整備が行われたこと、関屋分水路から上流の河川水が補給されていることから、年間を通して魚が豊富なのかもかもしれない。

西暦	月	日	日誌
2025	2	10	ウォーキングで、信濃川右岸八千代橋周辺のやすらぎ提で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、スパイク付長靴で出かける。気温は4~4℃、北西の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は64%、傘はささず。ウミネコ幼鳥第3回冬羽に換羽中、ヒドリガモ♀と♂、ウミネコ幼鳥第3回冬羽に換羽中、ハクセキレイ♂冬羽に移行中前姿、を撮影した。ウミネコは、「フィールド図鑑日本の野鳥」の姿図に、第1回冬羽、第2回冬羽、成鳥冬羽が記載され、幼鳥は4年で成鳥になると書いてある。姿図に第3回冬羽は記載されていないが、撮影画像は第2回冬羽と成鳥冬羽の両方の特徴があることから、第3回冬羽に換羽中と推定した。やすらぎ提の張芝のあたりは積雪深が20cmくらいあり、ヒドリガモが採餌できない状況であった。群れから逸れたのか？、岸辺に3羽のヒドリガモがいたが、ハクセキレイを撮影した数秒の間に、どこかへ飛び去った。
2025	2	12	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、ブーツで出かける。気温は1~4℃、南南西の風3m/s、陽射しは弱い、湿度は76%、傘はささず。6羽のオオハクチョウ、鳥屋野潟の雪景色、コハクチョウ群れ(14羽)、鳥屋野潟の雪景色、鳥屋野潟公園遊歩道の雪景色、コハクチョウ幼鳥1羽と成鳥2羽、セグロカモメ横姿、を撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」の地図に、オオハクチョウとコハクチョウの繁殖地は黄色で着色され、越冬地は青色で着色されている。オオハクチョウの繁殖地は主に亜寒帯のタイガ地帯(ロシア語で“針葉樹林”地帯)で、コハクチョウの繁殖地は主に寒帯のツンドラ地帯(永久凍土が広がる降雨量の少ない地域)である。コハクチョウの平均体長133cm×平均翼開長203cm=26999、オオハクチョウの平均体長153cm×平均翼開長231cm=35343であることから、オオハクチョウはコハクチョウより約1.3倍も大きいサイズである。グーグルアースで日本までの凡その直線距離を測定すると、コハクチョウが3700km、オオハクチョウは2000kmである。地図上では、越冬地の日本に渡来するために、コハクチョウはオオハクチョウの約2倍の距離を飛んでくる計算となる。
2025	2	15	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、ブーツで出かける。気温は5~8℃、南の風3m/s、陽射しは暖かい、湿度は71%、帰りに陽傘をさす。ミサゴ♀飛翔、鳥屋野潟、トモエガモとオナガガモとマガモの群れ、を撮影した。ミサゴは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄ほぼ同色。雄の胸は褐色みが少なく、雌は多い。幼鳥の翼上面の各羽縁は白っぽい。』と書かれていることから♀と同定した。しばらく、旋回して行ったり来たりしていたが、獲物の魚が見つからないのか？西の方へ飛び去って行った。
2025	2	16	鳥屋野潟公園の弁天橋周辺で水鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は6~9℃、南の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は81%、傘をささず。ダイサギが岸辺を歩く横姿、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽に換羽中オレンジ色の羽前姿、を撮影した。ダイサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『全長80~104cm、翼開長140~170cm』と書いてある。鳥の全長は、嘴の先から尾羽の先までの長さであるが、ダイサギは首と足が長くスタイルが良いので200cmくらいある様に見える。 カンムリカイツブリのオレンジ色の羽の原因は次のとおりである。鳥屋野潟に流入する排水路上流の水田地帯の水稲は「けい酸植物」と言われている。水田における鉄分の効果は、根を保護する働きが大きい。鉄分は、根を傷める硫化水素(有害ガス)の発生を軽減し、根腐れを防ぐ効果がある。この根腐れを防ぐことにより、秋落ち(秋に肥料効果が薄れ、生育が衰える現象)やごま葉枯れ病の改善に効果を発揮する。また、根が褐色になるのは鉄分が根を保護(コーティング)しているからである。この鉄分が稲刈り後に暗渠排水や排水路から鳥屋野潟へ流入して底に溜まることから、冬期に水中に潜って小魚等を捕獲するカンムリカイツブリがオレンジ色(明るい鉄錆色)に染まってしまうのである。

西暦	月	日	日誌
2025	2	27	<p>ウォーキングで、信濃川右岸八千代橋から信濃川下流左岸の新潟市歴史博物館みなとびあ付近まで野鳥との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ダウン、シューズで出かける。気温は6~9℃、南西の風2m/s、陽射しは暖かい、湿度は60%、陽傘をさす。アメリカヒドリ♂遊泳横姿、アメリカヒドリ♂とヒドリガモ♀、ウミネコ夏羽に換羽中(前姿)、柳都大橋下流景観、ユリカモメ冬羽、を撮影した。ユリカモメ冬羽は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『分布・季節:冬鳥。ほぼ全国。環境:沿岸、湾内、港、河口、湖沼、池、河川など。行動:休息場から早朝に飛び立ち、採食場へ移動して小魚やゴカイ、昆虫類などを食べる。形態:雌雄同色。全国で見られる小型カモメの多くは本種。夏羽の頭部は濃い焦茶色。若い個体の足は橙色。鳴き声:「ギーィ」などと鳴く。類似種との識別:ズグロカモメは一回り小さく、嘴は短めで黒い。夏羽の頭部は本種の焦茶色と違って黒く、成鳥の初列風切最外側は白いことで識別できる。』と書いてあり、成鳥冬羽と夏羽、第1回冬羽、幼鳥の姿図が描かれている。撮影画像は、嘴が赤く先が黒い、足も赤いことから冬羽と同定した。</p>
2025	3	1	<p>鳥屋野潟公園の弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は10~13℃、南南西の風4m/s、陽射しは暖かい、湿度は76%、日傘をさす。オオバン遊泳見返り、鳥屋野潟、トモエガモとオナガガモの群れ、鳥屋野潟、排水樋門の吐き口、アオジ♀横姿、カイツブリ夏羽に換羽中見返り、鳥屋野潟、片足で岸辺に佇むアオサギ(前姿)、ダイサギの横顔、ダイサギが水の中を歩いて獲物を探す、を撮影した。トモエガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布:冬鳥。本州の日本海側に多く、太平洋側では不定期に少数が記録されるだけ。南西諸島では迷鳥。環境:河川、池、湖沼など。行動:日中は休息し、夕方から行動しはじめ、水中に潜って沈んでいるドングリヤ、地上ではイネ科植物の種子などを食べる。形態:雄の顔にある巴模様は、雌にもうっすらとそれらしきものが見られる。鳴き声:低い声で「クオツ」「ググツ」などと鳴く。類似種との識別:雌はシマアジ雌に似るが、本種の眼の上下の白線は目立たない。全長39~43cm』と書いてある。トモエガモは、鳥屋野潟の沖合でオナガガモやマガモなどの群れに混じって、波間に漂うように休息していることが多い。全長39~43cmでコガモ(全長34~38cm)より一回り大きい、オオタカなどの猛禽類に捕食される可能性があることから、自分より大きなオナガガモ(全長♂61-76cm)やマガモ(全長50~65cm)と一緒に居るのかも知れない。なお、日本の狩猟鳥獣の鳥類カモ科は、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、クロガモの11種である。トモエガモは入っていない。</p>
2025	3	2	<p>弁天橋周辺と鳥屋野潟北岸で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は8~13℃、南南西の風3m/s、陽射しは暖かい、湿度は77%、帰りに日傘をさす。嘴を羽に隠して休むコガモ♀と♂、鳥屋野潟、トモエガモとオナガガモの群れ、カワウ♂繁殖羽横姿、ノスリ横姿、ノスリ後姿見返り、鳥屋野潟、を撮影した。ノスリは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布:主に中部地方以北で留鳥または冬鳥で、それより南では冬鳥。環境:平地から山地の林、草原、農耕地、牧場、河原など。行動:冬鳥として渡来するほうが数が多い。主にネズミ類を捕り、両生類や虫類、鳥類なども食べる。形態:雌雄ほぼ同色。成鳥の虹彩は暗色で、幼鳥は淡黄色。雄成鳥の羽衣の色は濃く、脛に斑が出る傾向はあるが絶対ではない。鳴き声:主に繁殖期「ピーー」と鳴く。類似種との識別:ケアシノスリの尾羽には黒くて太い帯があり、オオノスリの脛は暗褐色。全長♂50~53cm♀5.3~60cm』と書いてある。ノスリは、新潟県では留鳥と言われている。しかし、今までに89画像撮影したが、10月~翌年の6月の撮影で、7月から9月の撮影画像は無い。夏季の暑さに弱いのか?、イネ科雑草やヨシ等が繁茂してネズミ類の狩りが出来ないのか?、たぶん、その期間は食物連鎖のライバルがいて生態的地位(ニッチ)を失うのだろう。</p>

西暦	月	日	日誌
2025	3	4	弁天橋周辺と鳥屋野潟北岸で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は3～5℃、東の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は56%、傘はささず。オナガ横姿、鳥屋野潟、ミサゴ♀飛翔、ミサゴ♀が樹冠にとまる横姿、を撮影した。ミサゴは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布:留鳥、冬鳥。ほぼ全国で、寒冷地のは冬期には暖地へ移動する。沖縄列島では冬鳥。環境:海岸、河口、湖沼、河川など。行動:多くは1～2羽で生活する。水面上を停空飛行して主に魚を獲る魚食性。近年、増加傾向にある。形態:雌雄ほぼ同色。雄の胸は褐色みが少なく、雌は多い。幼鳥の翼上面の各羽縁は白っぽい。鳴き声:「ピョビョ」などと鳴く。類似種との識別:ハチクマの白いタイプに似ているが、本種より頸が長く見え、翼の幅が広いことで識別できる。全長♂54cm♀64cm翼開長155～175cm』と書いてある。さらに、「にいがた野鳥日誌」によると、『冬季に南へ移動する個体と、年間を通じてとどまる留鳥の割合がほぼ同数。魚食のため、魚を掴みやすいように4本の足指の爪の長さが同じである。他のタカは第一趾と二趾が同じで、あとは短い。』と書いてある。翼が長く大きいので、飛んでる姿を見るとミサゴだと、すぐ分かる。
2025	3	8	弁天橋周辺と鳥屋野潟北岸で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は4～5℃、南の風2m/s、陽射しは弱い、湿度は58%、帰りに日傘をさす。コガモ♀横姿、コガモ♂横姿、カイツブリ夏羽に換羽中がスジエビを銜える(後姿)、鳥屋野潟、ノスリ後姿、マガモの♀2羽と♂2羽、を撮影した。スジエビは、「日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑」に、『形態:体長約63mmに達する。体色は全体に半透明で、頭胸甲には濃褐色の斜めの帯、腹部には横縞がある。胸脚の関節部は黄色や橙色である。湖沼にすむものは体色や模様が薄い。中卵中産型。分布:北海道～奄美大島にかけて記録がある。生息地:河川の下流から上流、湖沼など幅広く生息する。抱卵期は3～10月、長径11～18mmの卵を、100～800個産む。』と書いてある。撮影画像が錆び鉄色なのは、長潟の水田地帯の鉄分が鳥屋野潟に流入して底に溜まっているからか?、もうちょっと鮮明な画像でない、はっきりと分からない。
2025	3	10	ウォーキングで、信濃川右岸八千代橋～昭和橋のやすらぎ堤と鳥屋野潟で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は7～9℃、南西の風1m/s、陽射しは暖かい、湿度は58%、帰りに日傘をさす。アメリカヒドリ♂後姿採餌、アメリカヒドリ♂前姿採餌、コサギが餌を探して歩く(横姿)、鳥屋野潟、ツグミ前姿、を撮影した。猛禽類と遭遇できなかった。
2025	3	13	ウォーキングで、鳥屋野潟で野鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は12～13℃、西南西の風7m/s、陽射しは暖かい、湿度は71%、帰りに日傘をさす。鳥屋野潟、カワウ繁殖羽♂横顔、鳥屋野潟の浮島の小灌木を撮影した。猛禽類と遭遇できなかったが、カワウ♂繁殖羽の横顔を鮮明に撮影できた。遠方にカムリカイツブリ冬羽らしき姿を発見し撮影したが不鮮明なのでGISデータ化しなかった。
2025	3	15	ウォーキングで、鳥屋野潟で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、マフラー、ジャンパー、シューズで出かける。気温は6～7℃、南西の風1m/s、陽射しは暖かい、湿度は54%、傘はささず。鳥屋野潟、カンツバキの赤い花、アオキの蕾(黄緑色)、スイセンの花(白)、鳥屋野潟、ダイサギ(婚姻色に移行中)の横姿、ダイサギ(婚姻色に移行中)の横顔、ダイサギ(婚姻色に移行中)の黄橙色の脚、ミコアイサ幼鳥(横姿)、を撮影した。猛禽類と遭遇できなかったが、婚姻色に移行中の冬鳥ダイサギを撮影できた。ミコアイサ幼鳥は、置いてきぼりをくったのか?一羽だけで不安そうにため池の中で逃げ回っていた。親が来るのを待っていたのかも知れない。

西暦	月	日	日誌
2025	3	24	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は11～16℃、南南東の風4m/s、陽射しは弱い、湿度は55%、傘はささず。カンムリカイツブリ若鳥冬羽横姿、鳥屋野潟、カンムリカイツブリカップル求愛行動一頭を左右に振る、ダイサギ(婚姻色に移行中)の前姿、ダイサギ(婚姻色に移行中)の横顔、アオサギ婚姻色に移行中前姿、を撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、ダイサギとアオサギの婚姻色の顔が描かれている。前者は、嘴付け根が黄緑色に、嘴が黒色になる。後者は、黄色い嘴の付け根から半分くらいが赤みを帯びた色になる。3月～4月は、野鳥たちの求愛行動の季節となる。もうすぐ春ですね～！ちょっと気取ってみませんか～！
2025	3	27	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は15～23℃、南南東の風6m/s、陽射しは暖かい、湿度は51%、日傘をさす。オオジュリン♀若鳥夏羽見返り、鳥屋野潟、ツルニチニチソウの堇色の花、ジョウビタキ♂第1回冬羽見返り、ジョウビタキ♂第1回冬羽横姿、ダイサギ婚姻色の飾り羽(横姿)、ダイサギ(婚姻色)の横顔、オオジュリン♂夏羽に換羽中(前姿)、を撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、オオジュリンは『季節・分布:漂鳥。ほぼ全国で記録があり、東北地方以北で繁殖。環境:平地のアシ原、河原など。行動:越冬期は小群で生活する。アシ原に依存し、他の場所に入ることは少ない。アシの葉鞘をむいて、中にいるカイガラムシを食べる。』と書いてある。ジョウビタキは『季節・分布:冬鳥。ほぼ全国。岐阜県や長野県、北海道などで繁殖が増加。環境:市街地から山地の林や農耕地、公園、河原など。行動:越冬期は雌雄に関係なくなわばりをもって生活する。渡来直後は高い場所で、なわばりを主張するように鳴く。昆虫やミミズ類、クモ類などを食べ、木の実も食べる。』と書いてある。
2025	4	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は10～12℃、南南東の風1m/s、陽射しは暖かい、湿度は68%、帰りはジャンパーを脱ぎ、日傘をさす。ダイサギ(婚姻色に移行中)の横姿、ミサゴが樹冠にとまる横姿、わた雲(高度—2000メートル)、オオジュリン♂夏羽に換羽中見返り、鳥屋野潟、ジョウビタキ♀見返り、カワウ♂繁殖羽に換羽中の横顔、ジョウビタキ♀前姿、カンムリカイツブリ夏羽に換羽中後姿、ヒメオドリコソウの花(淡紅色)、深水で小魚を嘴に挟むアオサギ(横姿)、モズ♀前姿、カンムリカイツブリ(夏羽)遊泳横姿、を撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、ジョウビタキは『季節・分布:冬鳥。ほぼ全国。岐阜県や長野県、北海道などで繁殖が増加。環境:市街地から山地の林や農耕地、公園、河原など。行動:越冬期は雌雄に関係なくなわばりをもって生活する。渡来直後は高い場所で、なわばりを主張するように鳴く。昆虫やミミズ類、クモ類などを食べ、木の実も食べる。』と書いてある。オオジュリンは漂鳥、モズは留鳥、または漂鳥。ダイサギは冬鳥、カンムリカイツブリは漂鳥、または冬鳥。夏羽に換羽中なのは若鳥かも知れない。カワウは留鳥、または漂鳥である。陽射しが暖かい日は、ジョウビタキなどの小鳥が活発に動き回る。
2025	4	8	2016年版の鳥類を更新(チュウサギまで)。

西暦	月	日	日誌
2025	4	10	弁天橋周辺と鳥屋野潟北岸で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は13～18℃、南東の風4m/s、陽射しは暖かい、湿度は61%、途中でジャンパーを脱ぎ、日傘をさす。鳥屋野潟、オオバン遊泳見返り、ソメイヨシノ花満開、ソメイヨシノの花びら、チュウダイサギ(婚姻色に移行中)が深水の中を歩く、岸辺に佇むアオサギ(前姿)、を撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」に婚姻色の顔が描かれている。チュウダイサギは、眼の虹彩が赤くなり、眼元が黄緑色、嘴は黒くなる。アオサギは、嘴が根本から半分くらい赤くなる。「自分で採れる薬になる植物図鑑」によると、ソメイヨシノは、『たん、咳、湿疹、腫れものに効用がある。乾燥した樹皮の内皮5～10gをカップ3の水で半量になるまで煎じて1日量とし、3回に分けて食間に服用する。』、また『ヤマザクラとエドヒガンも、乾燥させた樹皮は桜皮(おうひ)とよばれ、たん、咳、腫れものなどに用いられる。』と書いてある。カップ3杯は540～600ccである。『容器は土瓶か土鍋がいちばん。耐熱ガラス容器でも可。中火にかけて煮立ってきたら弱火にし40～50分、水が半分になるまで煮つめる。』と書いてある。ちなみに、筆者は、薬用植物を煎じて服用した経験は無い。
2025	4	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は14～22℃、南の風3m/s、陽射しは暖かい、湿度は60%、帰りはジャンパーを脱ぎ、日傘をさす。鳥屋野潟、コガモ♀と♂、ソメイヨシノの花、ツグミ見返り、鳥屋野潟、アカミガメ甲羅干し、カンムリカイツブリ(夏羽)浮上横姿、カンムリカイツブリ(夏羽)浮上見返り、鳥屋野潟、アオサギ婚姻色に移行中前顔、アオサギ婚姻色に移行中が岸辺を歩く、ダイサギ(婚姻色に移行中)の横姿、ダイサギ(婚姻色に移行中)の横顔、カワウ幼鳥羽乾かず後姿、コイの頭部、を撮影した。コイは「日本魚類館(小学館の図鑑Z)」に、『北海道、本州、四国、九州の自然水域に分布。関東地方以西では野生型(マゴイ、ノゴイ)と飼育型(ヤマトゴイ)が区別されてきた。「あらい」や「こいこく」などで食されるほか、観賞魚として親しまれている。』と書いてある。日本在来のコイは野生型で、環境省では絶滅のおそれのある地域個体群(琵琶湖在来型)、国際自然保護連合(IUCN)では絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。飼育型は、大陸から導入された養殖系統に由来し、野生型との自然交雑個体も含む。この文献によると、新潟県のコイは飼育型(ヤマトゴイ)なのか? しかし、「新潟市 潟のデジタル博物館」の種名は「コイ」と表示されている。交雑個体が多いから分類できないということか?
2025	4	21	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は12～15℃、北の風1m/s、陽射しは暖かい、湿度は69%、弁天橋でジャンパーを脱ぎ、日傘をさす。ミサゴ飛翔魚捕獲、鳥屋野潟、キジバトグルーミング見返り、ヒヨドリの地鳴き、鳥屋野潟、アオジ♂横姿、カンムリカイツブリ(夏羽)遊泳横姿、を撮影した。鳥の鳴き声等について「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『 <b>さえずり</b> は、主に繁殖期に、小鳥類の雄がなわばりを宣言するときの鳴き声のこと。鳥(種)によっては、雌に求愛する鳴き声を指すこともある。』、『 <b>地鳴き</b> は、さえずり以外の鳴き声で、単純な声である場合が多い。』、『 <b>ぐぜり</b> は、さえずりに似た声で、小さくつぶやくような鳴き声をいう。』、『 <b>ドラミング</b> は、キツキ類が枯れ木などを嘴で激しく突いて出す音で、さえずりと同じ意味をもつ。また、同じような意味の行動に、キジが翼を激しく打ち振るわせて音を出す「 <b>母衣打ち</b> 」や、アホウドリ類が上下の嘴を小刻みに打ち鳴らす「 <b>クラタリング</b> 」がある。』と書いてある。
2025	4	22	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～18℃、北東の風2m/s、陽射しは暖かい、湿度は49%、日傘をさす。片足で岸辺に佇むアオサギ(前姿)、鳥屋野潟、ハシボソガラスの巣(抱卵?)、カンムリカイツブリ(夏羽)遊泳横姿、鳥屋野潟、カワウ幼鳥前姿、ハナミズキ 緑の蕾と白い総苞片、カンムリカイツブリ夏羽水浴び、カンムリカイツブリカップル求愛行動一頭を左右に振る、鳥屋野潟、カムルチー、を撮影した。

西暦	月	日	日誌
2025	4	25	弁天橋で水鳥との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～16℃、南南西の風5m/s、陽射しは弱い、湿度は75%、時々突風が吹いて日傘がさせない。鳥屋野湯、岸辺に佇むアオサギ(横姿)、カムリカイツブリ夏羽♀と♂が遊泳(横姿)、を撮影した。風が湖面を走り、暗い空であったが、県立図書館から帰るころに陽が射してきた。カムリカイツブリは雌雄同色である。筆者は、体の大きい方が♂と考えていたが「フィールド図鑑日本の野鳥」などの文献には雌雄の見分け方は記載されていない。尚、ネット検索では、『オスとメスを見分けるのはかなり難しいですが、ペアで並んでいると冠羽や飾り羽が若干オスの方が長い』、他に、『カムリカイツブリの雌雄は並ぶと体格差が明らかということで、背中に載せている大きいほうがオス、餌を運んでいる華奢ですらったほうがメス』と書いてある。筆者の写真は求愛行動はしていないが、♀と♂が互いを意識して並走して遊泳し、営巣地を散策している様に見えた。餌を探す親子や兄弟の様には見えなかった。
2025	4	26	ウオーキングで、柳都大橋下流から信濃川左岸新潟市歴史博物館みなとびあ付近まで野鳥との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は13～15℃、西南西の風7m/s、陽射しは暖かい、湿度は56%、時々突風が吹き陽傘をさせず。ホシハジロ♂とキンクロハジロ♂、キンクロハジロ♂横姿、キンクロハジロ♂幼鳥第1回冬羽に換羽中、コガモ♀と♂、信濃川左岸、を撮影した。キンクロハジロ♂幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雄幼鳥は頭からの上面が雌幼鳥よりもっと黒っぽい』と書いてあり、姿図が描かれていることから♂幼鳥第1回冬羽に換羽中と同定した。
2025	4	27	江南区下早通の水田地帯で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～22℃、南の風4m/s、陽射しは暖かい、湿度は43%、時々突風が吹くが、日傘をさす。小松堀排水路、幹線用水路、代掻き作業の水田で佇むアオサギ(前姿)、ダイサギ婚姻色が代掻き作業の水田に佇む(後姿)、代掻き作業の水田でチュウダイサギ夏羽が羽を逆立てる、代掻き作業の水田でチュウダイサギ夏羽が餌を探す、代掻き作業の水田でチュウダイサギ夏羽がミミズを口に挟む、チュウダイサギ夏羽が代掻き作業の水田を歩く(横姿)、を撮影した。ダイサギとチュウダイサギの見分け方は「新-日本の野鳥(山溪ハンディ図鑑)」に、『冬羽(嘴が黄色)の場合は、ダイサギは脛節とふしよの一部が肉色、チュウダイサギは全体が黒色または脛節が肉色でとふしよが黒色である。夏羽(嘴が黒色)や婚姻色(嘴が黒色で赤い眼)の場合は、ダイサギはチュウダイサギと変わらない。脛節の赤みは出ても、ふしよの赤みが無いか、あってもごくわずかである。チュウダイサギは脛節が赤く、ふしよにも赤みが出るが、個体変異がある。』と書いてある。冬羽の場合は、ふしよの一部が肉色ならダイサギ、足全体が黒色またはふしよが黒色ならばチュウダイサギである。夏羽の場合は、足の色だけでは見分けることはできないようである。体格はダイサギ>チュウダイサギであるが、両者が並んで立っていることは、ほとんどない。今回は、たまたま、眼が赤いダイサギがチュウダイサギの傍に飛んで行って、「ここは俺の縄張りだ!!」と威嚇した。体格の小さい方がチュウサギかと思ったら、嘴が黒く眼が緑色なので、チュウダイサギと同定した。